

【姫路市立白鷺小中学校】の取組

1 テーマ

「探究し続ける児童生徒の育成」

2 テーマ設定の理由

第5期科学技術基本計画において、内閣府より提唱された society5.0 で実現する、めざすべき未来社会の姿。それは、IoTで全ての人とモノとがつながり、様々な知識や情報が共有される社会であり、AIの発達により、ロボットや自動走行車などの技術で、地方の過疎化、生活の格差などの社会的課題への解決が期待される社会である。つまり、すべての人が明るい希望をもてる社会の実現が目標とされている。この未来社会を生きる主人公が今の子どもたちであり、その子どもたちには、社会の急激な変化に主体的に向き合いながら、よりよい生き方を見つけ、よりよい社会を創る担い手となることが期待されている。

さて、これからの時代に生きる子どもたちには、どのような資質・能力を育てなければよいのだろうか。

子どもたちが直面する社会的課題は、(SDGsの17の目標からも分かるように)解決の道筋が明らかでなかったり、唯一の正解が存在しなかったりするようなものが予想され、それらの諸課題に対して、子どもたちには、対象と向き合い、多様な他者と協働しながら「最適解」や「納得解」を見出すことが求められる。そこで本校では、学校教育目標を『確かな学力を中核とした総合的な人間力の育成』とし、それを子どもたちの姿で具現化すべく、研究テーマを「探究し続ける児童生徒の育成」とし、『探究』を鍵概念に据え、実践に取り組んでいくこととした。未来社会を担う本校の子どもたちに、先行き不透明な社会を生き抜くために必要とされる資質・能力の素地の一端を、学校教育で担っていこうと考えたのである。

3 研究経過

(1) 1年次(令和3年度)の取組

① めざす子ども像の設定

学校教育目標『確かな学力を中核とした総合的な人間力の育成』を具現化する、学校教育を通して育成をめざす子ども像を次のように設定した。

知・徳・体のバランスを考えて5つのめざす子ども像を設定し、各種教育活動や授業において、全教職員で意識して取り組めるようにした。

◇見通しをもち、進んで学び続ける子
◇自分を大切にし、他者を思いやる子
◇地域と連携し、社会参画する子

◇知的好奇心と豊かな感性をもつ子
◇夢や希望の実現に向けて、粘り強く努力する子

② めざす授業の姿

めざす授業像（図1）を、「児童生徒が自分ごととして課題に挑戦し、対象世界（教材）とも仲間とも自分自身とも対話しながら、教科等の見方・考え方を働かせて解決する学習過程がある授業」とした。

めざす子ども像を具現化するために、1時間の授業の中や単元の中で探究のプロセスを取り入れた授業を展開することを大切にしたい。

探究のプロセス	
① 問いを立てる	② 予想する
③ 確かめる（やってみる）	④ まとめる（表現する）
⑤ 振り返る（新たな問いを立てる）	

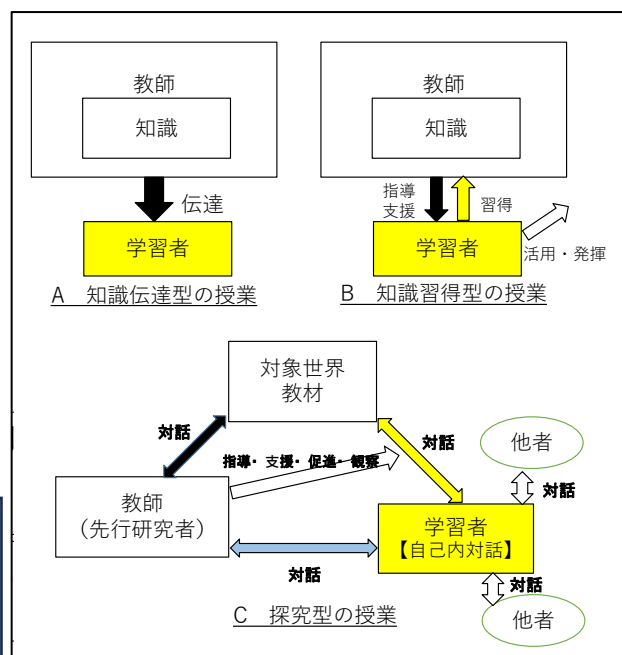


図1 めざす授業像

③ 児童・生徒の探究を支えるために必要な教師の資質・能力（表1）

授業の指導者、支援者である教師は、子どもの学びの様子を見取りながら、適切に支援していく必要がある。そのためには、単元レベルで子どもに身に付けた力を描き、子ども一人一人の学びの状況を見取りながら、タイミングを大切に支援していく教師の姿勢が必要となる。

児童・生徒の探究を支えるために必要な教師の資質・能力	
研究者として	教材研究を通して、児童生徒に育成する資質・能力を明らかにし、単元を構成し、探究シート（学習指導案）として表現できる。
指導者として	児童生徒の反応に呼应しながら、発問や板書を工夫したり、各種教具を効果的に活用したりして、本時の目標達成に向けて授業することができる。
支援者として	児童生徒の学習状況を把握して、この特性に応じた足場かけをつくることことができる。
観察者として	授業における児童生徒のつまづきを見取り、指導や支援につなげることができる。
設計者として	児童生徒の探究につながる掲示物や学習規律などの学習環境を構築することができる。
促進者として	児童生徒が主体性や創造性を発揮しながら対話を深められるように、話し合いの場を支えることができる。
連携者として	自ら地域の人材や専門家と連絡を取ったり、連絡要請を依頼したりするなどして、外部人材を学習に活用することができる。

表1 児童・生徒の探究を支えるために必要な教師の資質・能力

④ 問いでつなぐ単元構想

授業を考える時にも、（教職員が）授業を見合い語り合う時にも、単元全体を通して授業をみるという視点が大切である。そのため、本校では独自の単元計画を作成した。それが「探究プラン」である。これは、毎時間の授業を主な問い（本質的な問い）でつないだ授業計画である。

(2) 2年次（令和4年度）の取組

① 研究テーマの見直しと目指す子ども像の設定

昨年度は研究テーマを「探究し続ける児童生徒の育成～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習過程の工夫～」として、教科部会を中心に授業研究を行ってきた。しかし、姫路市児童生徒意識調査（2021年）の結果から、本校の児童生徒は、学習の過程や結果をアウトプットする機会が十分ではなかったり、主体的にアウトプットしたりしていない状況であるということが推察された。

そこで2022年度は、研究主題は昨年度と同様としつつ、副題を「対話でつなげる学びのデザインを通して」とした。

また、児童・生徒の実態の分析と10年後の社会の予想をもとに、職員研修で身につけさせたい力の検討を行った（写真1）。グループワークでは、粘り強さやレジリエンス、自立等の「自分力」や、未来を予想する力、社会に目を向けて関わろうとする



写真1 身につけさせたい力の検討の様子

力、想像力等の「未来を“そうぞう”する力」、多様性を認めたり他社の考えを受け入れたり対話したりする「共生する力」等、様々な力が必要であるという意見が出た。この研修を通して、身につけさせたい力が明確になったことはカリキュラムマネジメントを進めていくうえで大きな成果であった。さらに、これまでは学習内容の系統性について話し合う場合、9年間では発達段階の違いを感じることも多かったが、必要な資質・能力は何かについて話し合うことで9年間のつながりを意識して子どもの成長を考えることができるようになった。

② 身につけさせたい力の再構成

研修を通して見えてきた「身につけさせたい力」を学校教育目標とのつながりを意識しながらバランスを整えるために、本校の目指す3つの子ども像と3つの資質・能力の3本柱の9つのマトリックス表に整理した（表2）。さらに、誰もが同じイメージを共有しやすくするために、「育成をめざす姿」に表記内容を変更した。このマトリックス表に表した9つの姿を、本校では「育成をめざす9つの姿」と呼び、「9つの姿が実現されれば、学校教育目標は達成されたことになる」と考え、この9つの姿を軸として、各種教育活動に取り組んでいく、新たな一步を踏み出した。特に研究では、授業の中で児童の「対話」を教師が意図的・効果的にデザインすることで「育成をめざす9つの姿」の実現を図ることを目指すこととした。

	「自らの学びを『探究』的に つくりあげる子」	「自他を大切にしながら自 分の役割を果たし、社会を 形成する子」	「見通しをもち、失敗をおそ れずに挑戦し、あきらめずが んばり抜く子」
知識及び技能	探究的な学習の過程を自 在に活用することができる	多様な視点で見ることが できる	自分の良さを大切にす ることができる
思考力、判断力、表現力 等	知識を構造的に組み立て ることができる	集団としての考えを形成 することができる	確かな見通しを立てるこ とができる
学びに向かう力、人間性等	自らの学びに価値を見出 すことができる	社会のために行動するこ とができる	自分の意志で決定するこ とができる

表2 育成をめざす9つの姿

③ 対話のある授業—学びをデザインするとは—

本校では、「対話」を、「自己とはべつのもの・ひととの【差異】から生まれる。対話によって、自己の価値観・理解が更新されるもの。」と定義している。

対話 1 (対象との対話) 既知と未知 (知っていることと知らないことの差異)

対話 2 (他者との対話) 自己と他者 (自分の理解・考えと他者の理解、考えとの差異)

対話 3 (自己との対話) 過去と現在と未来 (学習前後の自己認識の差異・未来の自分との差異)

これらの対話を成立させるために、授業の中では以下の3点を意識していくこととした。

対話 1 対象に対する興味から関心へ

→教科・領域の本質的な理解を目指し、わかっているつもりをくずす。

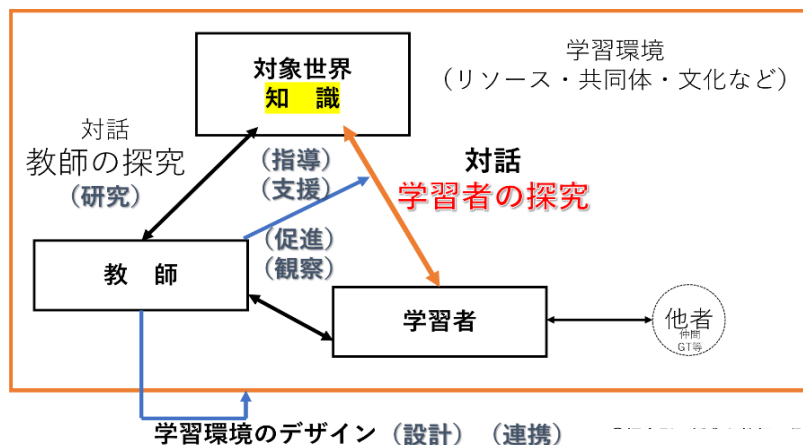
対話 2 自己と他者との考えの可視化

→思考スキルの性質を理解したうえで、思考ツールやタブレットを効果的に活用する。

対話 3 振り返りの視点の設定

→予想との違い、新たな問い、仲間との交流、自己変容、対象への日常的な関わり等視点を与えて振り返る。

学習者(児童生徒)が対象・他者・自己との対話を通して、自らの学びを深め、探究し続けることができるようにするために、教師は学習者と関わりながら学びを構成する「ひと・もの・こと」をデザインする。2022年度は、昨年度まで実践を積み重ねてきた探究型の構想図に改良を加え、学習者の対話について図2のように考えた。この図からもわかるように、教師には、学習者である児童生徒が、様々な他者や自己との対話によって、「差異」を自覚する授業をデザインすることが必要である。本校が大切にしてきた探究のプロセス(問いを立てる・予想する・確かめる・まとめる・振り返る)をもとにした授業実践を通して、育成をめざす9つの姿の実現をめざす。特に、児童生徒が対話でつながり合う授業づくりを目指した。



④ 提案授業を通して学び合う



写真2 対話を意識した授業の様子（5年生 社会科）



写真3 対話を意識した授業の様子（8年生 音楽科）

提案授業を通して、学び合う機会を創出した。提案授業1（写真2）では、Jamboardを活用して、児童それぞれが調べ得た情報と友だちの情報を比較・共有する授業を展開した。授業中の子どもたちの姿から、情報を共有する際は有効だったJamboardも、まとめる際には、子どもたちの対話を促進するツールとしては十分ではなかったということがわかった。対話を促進するための手立てを授業者自身がもっと分析し、それを、いつ、どのように講じるのか、予め考えておくことの大切さを認識することができた。

提案授業2（写真3）では、1番・2番の歌詞に散りばめられた音楽的要素を手掛かりに、3番の歌詞を工夫して表現する生徒の姿を目指した授業であった。しかし、実際の授業は、授業者が描いていたほどの生徒の姿が見られなかったことから、対話に臨む子どもたちが習得している知識・技能はどの程度か、子どもたちの学びを、教師が、いつ、どのように見取り関わるのかがポイントとなることが分かった。子どもたちの対話を促進させるためには、「差異の自覚化」や「差異の可視化」が必要である。授業者である教師は、子どもの行為や言葉を受け入れつなくことで、学習したことを確かな学びへとスムーズに接続する役割を担っているのである。

（3） 3年次（令和5年度）の取組

① 研究テーマの見直しとビジョンの共有

「育成をめざす9つの姿」を作成し、全教職員でビジョンを共有して歩みだした昨年度の成果と課題を出し合い、2023年度、授業を通して特に意識して取り組む観点を話し合った（表3）。その話し合う過程で我々が注目したのが、スプレッドシートに残された、児童生徒がこれから必要だと思う力であった（図3）。「最後まであきらめない」、「人を大切にする」、「失敗を恐れない」など、これらは非認知能力と呼ばれ、テストなどでははかることが難しい力である。しかし、アンケートに並んだ言葉から、子どもたちは切実に、これらの力こそ大切だと考えてい

ることが分かった。これからの時代の変化に対応するためには、子どもたちが学ぶことに謙虚で、且つ、主体的である必要がある。子どもたちが必要だと考えている力に焦点をあて、研究を進めていくことが決まった。

そこで、2023年度の研究テーマを「探究し続ける児童生徒の育成～心揺さぶる仕掛けのある授業～」とし、授業の中で、その力の醸成をねらっていくというビジョンを共有した。

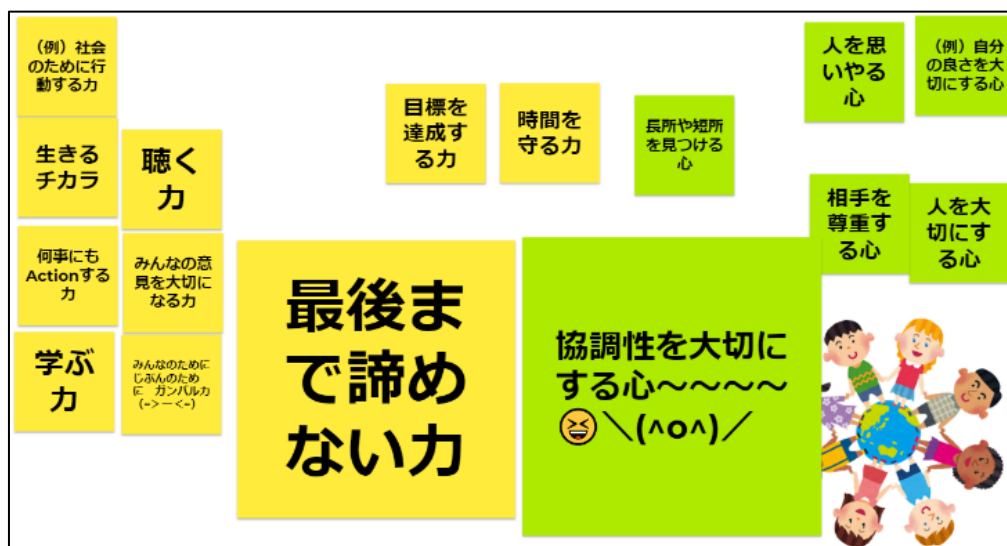


図3 「これからの時代に必要だと思う」

	探究する子	社会をつくる子	がんばりぬく子
知識及び技能	①課題解決に向けて必要な情報を思考ツールを用いて整理することができる。	④社会には様々な「ひと」「もの」「こと」があり、互いに関わり合っていることに気づく。	⑦自分の性質について知り、自分にできることがわかる。
思考・判断・表現等	②課題解決に向けて必要な情報を精選し、まとめ、伝えることができる。	⑤互いの意見を入れながら、対話を通して意見を形成することができる。	⑧見通しをもちながら計画を立てたり、状況に応じて調整したりすることができる。
学びに向かう力・人間性等	③様々なことに興味をもち、問いを見出したり、意欲的に学んだりしている。	⑥他者の考えを尊重し、認めながら、協力して行動しようとしている。	⑨目標に向けて粘り強く取り組もうとする。
具体的な行動指標			
探究する子	<u>様々なことに興味を持ち、問いを見出したり、意欲的に学んだりしている。</u> ○興味・関心を持ってそうなことを探し、問いを見出している。 ○見出した問いについて調べたり、さらに深めたりしている。 ○深めたことを意欲的に話し合ったり、伝えたりしている。		
社会をつくる子	<u>他者の考えを尊重し、認めながら協力して行動しようとしている。</u> ○意見の違いなどがあってもぶつかっても、折り合いをつけられている。 ○困っている人に気付いて、必要な手助けができている。 ○互いの考えを取り入れながら意見をまとめている。		
がんばりぬく子	<u>目標に向けて粘り強く取り組もうとしている。</u> ○自分の目標をもって、その達成に向けて挑んでいる。 ○困難なことがあっても諦めずに取り組み続けている。 ○失敗するようなことがあっても気持ちを切り替えて取り組んでいる。		

表3 育成をめざす9つの姿と具体的な行動指標

② 提案授業を通して学びあう

中山准教授の指導の下、本年度の指導案にかわるものを「ギミックシート」とし、これを作成して授業に臨んだ。ギミックとは、学習者の非認知能力を引き出すきっかけになるような授業者による間接的な仕掛け（空間・教具・活動）である。授業者は、そのギミックを講じることで子どものどのような非認知能力に刺激を与えたいのか意図して授業をデザインする。一方、参観者は、授業者が描いた（子どもの）感情曲線と照らし合わせて子どもの姿を見取り、授業者が想定したギミックが効果的に働いていたのかどうか、事後で検討する、このような進め方で非認知能力に焦点をあてた研究を進めた。

提案授業（写真4）では、参観する教師は、1時間を通して観察する子どもを一人決め、その学習の様子や教師が講じるギミックによって感情がどのように動くのか、つぶさに観察していることがよくわかる。従来の授業であれば、授業の目標が達成されているかどうか子どもの姿で見るので、事後の話し合いも議論が多岐にわたるが、本研究では、育てたい非認知能力とそれに刺激を与えるギミックがはっきりしているため、参観者も観察する視点がはっきりしているのが特徴である。

事後研（写真5）では、授業者が想定した児童の感情曲線と参観者が見取った児童の感情曲線を比べるところから始めた。参観者は、子どもの具体的な事実（印象的な姿、発言、つぶやき、記述、表情、変容、かかわり）を根拠に、授業者の意図したギミックが、子どもの非認知能力にいかにかつ働いたのか議論した。最後に、授業者が自身の授業を振り返った。「チャレンジしてよかった。」と語った授業者。授業にチャレンジした者がそう思えた、実に濃密な研修となった。



写真4 授業の様子



写真5 事後研の様子

4 成果と課題

3年間の研究では、「探究し続ける児童生徒の育成」を研究テーマとし、目の前の子どもの姿で具現化することを目指して、各教科・領域部会において取り組んできた。教職員の資質向上のため、テーマを厳選した研修を行い、すべての教職員が「主体的・対話的で深い学びを実現する学習過程」を設計できるよう、横のつながりも大切にしてきた。2年次の研究において「育成をめざす9つの姿」を設定してから、1年生から9年生までどのような子どもを育てていくのかというビジョンが明確に定まり、全教職員が同じ方向を向いて取り組むことができてきた。また、学び合うことを大切にしてきた提案授業では、特に、授業後の研修会で、授業者の手腕に焦点をあてるので

はなく、あくまで、子どもの具体的な姿で語り合い、それが、授業者が意図したものであったかどうか、またそれはなぜかについて真剣に議論してきた。さらに、リフレクションを通じて自身の授業を見つめ直し、明日からの授業に活かせるようにもした。

この3年の取組を通じて、子どもも教職員も確実に変わってきていると実感する。引き続き、同僚性と協働性を大切にしながら、「育成をめざす9つの姿」を子どもの姿で実現すべく、取り組んでいきたい。

—参考文献—

- ・石井 英真『未来の学校』—日本標準 2020年—
- ・石井 英真『ヤマ場をおさえる学習評価』—図書文化 2021年—
- ・田村 学 『深い学び』—東洋館出版社 2018年—
- ・田村 学 『学習評価』—東洋館出版社 2021年—
- ・奈須 正裕『個別最適な学びと協働的な学び』—東洋館出版社 2021年—
- ・中山 芳一『教師のための「非認知能力」の育て方』—明治図書 2023年—
- ・中山 芳一『自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ』—東京書籍 2020年—
- ・前田 康裕『まんがで知るデジタルな学び』—さくら社 2022年—
- ・総合教育技術—小学館 2021年10・11号—